

楷書体前史

―楷書体以前の隸書と隸書体から楷書体へ向かう形態変化の契機―

黒 田 洋 子

はじめに

従来の書道史では、篆書・隸書・草書・行書・楷書の五つを基本五体とする。そのうち楷書体については、後漢以降南北朝時代を経て隋・唐に至る間に、隸書から草書や行書を介して成立したといわれている。そして初唐の三大書家、歐陽詢、虞世南、褚遂良らの楷書作品に見られる均整の取れた美しさに、「楷書体の完成」を見るのが一般的である。但し、これは書を芸術と見て、表現様式の変遷から捉えた見方である。

しかし書は芸術である前に、社会の中で実用的な役割を担っていたのであり、「書」自体に重要な情報が込められている。そのため社会的要因や実用的な側面から書体の性

格や変遷を論じ、書を歴史資料として解明する必要がある。今までにそういった視点から書を論じた研究はあまり見られなかった。

そこで前稿ではまず、以下の点を明らかにした。従来の書道史では「完成」と見る初唐の楷書体について、実は公権力のもとで整理された書体であったことを述べた。すなわち太宗のもとに集められた弘文館学士らが、王羲之の書法をもとに整備した書体であったこと、また律令文書行政を支える上で必要不可欠な技術として、実務官人に徹底的に学ばせ、実用の場で使わせることを主たる目的とした書体であったことを指摘した。¹⁾

また楷書という書体名称が成立したのは、宋代以降のことであると言われている。唐代までは、公文に記されるよ

うな正式の書体は「正書」や「真書」という名称で見え、草書と対極をなすものであった。これらは形の上ではすだに変貌を遂げているにもかかわらず、一貫して隸書という概念で認識されており、我々がいうところの楷書体に対する独立した名称や概念は存在しなかつたのである。

以上が前稿で明らかにした点である。ではなぜ形態的には隸書体から楷書体へと徐々に変化したにも関わらず、唐代にいたってもなお公文などに記す正書や真書は隸書と認識されていたのであろうか。

本稿では、楷書体が成立する以前、すなわち後漢から北魏にかけての隸書体が社会の中でどのように認識されていたかを考察する。また近年出土した後漢簡牘や金石文に楷書体に近いものが見られることから、最近の研究では楷書体は後漢のころ生じたと説明されるようになったが、その契機についても探っていきたい。

一、四賢と蔡邕

書論と呼ばれる書を論じた書物や、書の普及に役立った筆法伝授の書の中では、張芝・鍾繇・王羲之・王献之の四

賢と呼ばれる名人の系統によって、成立過程が説明され、その正統性が示される。それによって書の普及・定着が図られた。

東晋・王羲之・献之父子の出現を受け、六朝時代には王羲之父子の書法が流行し賞賛されるようになる。王羲之父子は草書の張芝と、正書の鍾繇を学んだとされ、六朝時代以降この四人を四賢と称するようになる。四賢の尊重は唐代以降も王羲之書法の権威を高めることで、その普及におおいに役立ったと思われる。

さて四賢の中で、正書の祖のように称される鍾繇については、虞世南の『書旨述』の中に、

鍾太傅（鍾繇）は德昇（劉德昇）に師資し、曹（曹喜）・蔡（蔡邕）に馳驚す。做学して一体を致し、真楷独り精妍を得。^①

と見え、そこでは鍾繇が曹喜と蔡邕の書を学び、独自の書体（真楷＝真の楷法）を生み出した、と記されている。

このように鍾繇が蔡邕を学んだとして、鍾繇よりさらに先に蔡邕が関連付けられていることについては、書を論じた史料の中でしばしば見られ、中田勇次郎氏によって両者の関連を示す史料が網羅・整理されている。^②

中田勇次郎氏によると、唐代以降のいわゆる筆法伝授とは「蔡邕を祖とし魏晋の鍾・王から六朝をへた伝統を伝えて、その權威を示すために立てられたものようで、すべて名家を中心として書法の相承伝授を示したものである」という。⁶⁾

書が盛んになった唐代以降には、筆法伝授の書においitてなれば逸話化したものも多かったたのであろう。

ところで蔡邕は、梁・袁昂『古今書評』によると、蔡邕の書は、骨氣洞達、爽爽として、神有り。⁷⁾

と記されている。また唐・作者未詳『伝授筆法人名』にも、蔡邕神に受く人なり。⁸⁾

とある。さらに唐・張懷瓘『書断』では「神品」「妙品」「能品」のうち「神品」に分類された十二人の中に、四賢らとともに並んでいる。そこでは、蔡邕が飛白を作ったとし、⁹⁾ 又た飛白を創造し、妙有りて絶倫、動に神功に合ふ。¹⁰⁾ と表現するほか、

伯喈（蔡邕）の八分・飛白は神に入る。¹¹⁾

といった表現が見られる。いずれも蔡邕の書に対し「神」の語を用いて表現している。「神」とは「万物の根源」であり、「神妙」とは、甚だ巧妙で人力の及ばないはたらき

のことをさす。あるいは「神功」とは神妙で測れない功績のことであるという。

事實はさておき、このように蔡邕は、筆法伝授の系譜の冒頭におかれて筆法の源とみなされ、あるいは「神」の語が示す如くに甚だ巧妙で、人力の及ばない功績があったと見なされる存在であったのである。すなわち四賢よりさらに遡って筆法伝授の系譜の始まりにおかれたのが蔡邕であった。では蔡邕とは、実際にはどのような人物であったのか。以下に見ていきたい。

二、蔡邕という人物

蔡邕は晋・衛恒『四体書勢』に
邕、篆勢を作りて曰く、（以下略）。¹²⁾

と見えるのを始め、宋・羊欣『古来能書人名』に

陳留の蔡邕は、後漢の左中郎将。篆・隸を善くす。斯（李斯）・喜（曹喜）の法を採る。真定宜父碑の文、猶世に伝はる。篆する者、師とす。¹³⁾

等の記載があり、書に関する史料の中では、しばしば篆書の名人としてその名が知られる人物である。¹⁴⁾

但し蔡邕は篆書の達人である前に、桓帝や靈帝のもとで政治に携わるとともに後漢末を代表する古文学派の学者であった。陳留郡圉県（現河南省）の出身で、博学なことから靈帝に拔擢され、その後董卓にも厚遇されたが、王允により獄死したことで知られる。

蔡邕に関して、書の達人としての面と、学者としての面が併せて考察されたことはあまりない。そこで以下ではこの両面の関連性について探っていききたい。すでに政治的な経歴に関しては多くの言及があるので、ここでは学問的経歴を中心に見ていくことにする。

蔡邕は熹平四（一七五）年桓帝の時代に馬日磾等とともに、すでに誤字が多く含まれるようになっていた六経の校訂を行い、いわゆる熹平石経を建てたことは有名である。

学問的業績としては石経の外に、『独断』を著したこともよく知られる人物である。『独断』は漢代の制度や文物をまとめたもので、『六典』等にもしばしば引用が見られ、唐代の諸制度や文物が準拠した書物として知られる。したがって今なお史料的価値の高い書物である。蔡邕は『独断』の他にも、数多くの著作を残したが、その大半は失われて

逸文が知られるのみとなっている。¹⁶⁾

蔡邕は師である胡広が「旧儀を博綜」してまとめた『漢制度』を元に、『独断』や、後述する『後漢書』や『統漢書』のもととなる志をまとめた。¹⁷⁾

胡広の『漢制度』については逸文が知られるのみであるが、それらと『独断』を比較すると、『独断』は『漢制度』をもとに著されたことがわかるという。また『独断』は靈帝の時代、熹平元年（一七二）の完成と推定されている。

『独断』を著した後、蔡邕は東觀で修史事業に携わり、『漢記』の撰述にあたった。『漢記』とは『漢書』に続いて編纂された史書で、『東觀漢記』の祖本と考えられている。¹⁸⁾

熹平六年（一七七）、蔡邕は投獄されたことで、『漢記』編纂の一時中断を余儀なくされた。しかし復帰後に、蔡邕はまず「志」にあたる「十意」¹⁹⁾に着手した。これは散佚して書物として伝わらないものの、『後漢書』や『統漢書』の志の原典の一部になったと考えられている。²⁰⁾

このような多くの著作物を残したことで知られる蔡邕であるが、一方政治的には董卓により出仕を強いられ、中郎将に累進し異例の出世を果たした。蔡中郎将という呼称はこの時の名称による。しかし董卓の反勢力である王允に

よって投獄される（一九二）。その際、馬日碑が「伯喈（蔡邕）は曠世の逸才にして多く漢の事を識る。後史を続成せしむれば、一代の大典とならん。」と助命を請うたが叶わず、惜しまれながら獄中で生涯を閉じた。

さらに『後漢書』蔡邕伝には、

其の撰集せる漢事、未だ録せられて以て後史を継がず。適ま靈紀及び十意を作り、又た諸々の列伝四十二篇を補うも、李傕の乱に因つて湮没して多く存せず。著す所の詩・賦・碑・誄・銘・讚・連珠・箴・弔・論議・「独断」・「勸学」・「釈誨」・「叙樂」・「女訓」・「篆勢」・祝文・章表・書記、凡そ百四篇、世に伝はる。²¹⁾

とあるように、蔡邕が編纂に携わった紀・志・列伝等、後漢の歴史的資料は李傕の乱（一九二―一九八）によって大半が失われ、一部の著作物が辛うじて世に伝わるのみであった。²²⁾

以上蔡邕の生涯を学問的業績を中心に見てきた。蔡邕については、彼が活躍する舞台となった後漢末の東観とそれを取りまく当時の学問情勢についても見ておく必要がある。

後漢の半ば頃から、それまで修史事業が行われていた蘭

台に代わり、洛陽城南宮の東方にあった東観が新たな修史事業の場となった。東観では、様々な記録類が編纂され、それらをもとにして『東観漢記』や范曄の『後漢書』など大規模な史書の編纂が展開された。

この東観は、安帝の代には正式に史官となり、後世の正史編纂に通じる修史の形態が定着することになる。東観がそれまでの蘭台を凌いで修史事業を掌る史官として台頭した背景には、政治的背景のほか、実は根本的な学問上の相違があったといわれる。²³⁾

蘭台では、図讖を基本理念に据えて修史事業を行った。図讖とは漢王朝を神聖王朝として絶対視する予言書である。すなわち蘭台ではこの図讖に基づいて漢王朝とその歴史を正当化した。例えば、班固の『漢書』に見える光武帝の歴史は、蘭台令史によって書かれたもので、図讖に基づいて漢王朝を擁護するものであった。

これに対し東観に集う学者達は、蘭台における図讖中心の歴史観と、それに基づく修史事業を批判し、光武帝の革命やその支配を絶対化する上での根柢となる図讖をすべて偽作として否定した。²⁴⁾

また図讖を中心とした歴史観を形成していたのは今文学

派であったのに対し、東観には経学を得意とする古文学派が参集した⁽²⁶⁾。

このように蔡邕ら古文学派が結集した東観では、史実に基づく記述と断代史という新たな叙述形式が成立し、その後の史書編纂の基礎が拓かれた。その合理性・客観性には班固の編纂意図との間に明らかな相違が見られる。

一方当時の社会は、後漢の安帝以後、現実問題が深刻化する中で図讖の影響力が衰退し、現実に対応した政策が必要とされ、大きな変革期を迎えていた。

こうした政治的変革期の中で、東観を中心とした蔡邕等、当時の古文学派の果たした役割は大きい。彼らは図讖が標榜する天に代わって、陰陽思想や無為自然の道といった超自然的能力に依りながらも、人間を重視する方向へと向かい、やがては歴史観を転換させ神聖王朝の歴史からの脱却へと向かった⁽²⁷⁾。

以上、蔡邕の学問的業績と、蔡邕ら古文学派がおかれた後漢末の変革期の状況を確認した。ここでは、蔡邕をはじめとする張衡、馬融や蘆植といった古文学派の学者達が、

正統派儒学に基づく蘭台の歴史観を打破し、時代の変革期の中で新たな歴史観、すなわち現代にも通じる歴史観を確立せんとしていた。蔡邕はその一人として新たな時代を切り拓く上で重要な役割を果たしたのである⁽²⁸⁾。

三、蔡邕に対する江式の認識

蔡邕について知る手がかりとしてもう一つ忘れてはならないのは、北魏・宣武帝に江式が奉った表に見られる、蔡邕の業績である。以下では江式の「論書表」を通じて、蔡邕が文字の歴史の中で、いかなる役割を果たしたかを明らかにしていきたい。

(一) 江式の「論書表」について

江式については、『魏書』及び『北史』の江式伝と、そこから引用した「論書表」が『法書要録』に採録されているほかはまとまった史料がないので詳細がわからない。しかし、江式の「論書表」は後漢から北魏における文字整理の経緯に関して、多くの情報を含んでいる⁽²⁹⁾。

考察に入る前にまず、江式の「論書表」について概略を

紹介する。

北魏の江式は延昌三(五一四)年三月、宣武帝に乱れた文字の整理を願ひ出る表を上奏した。その内容はそれまでに行われてきた歴代の文字修訂作業の経緯を説明し、自らが行おうとする事業の根拠と必要性を表して、皇帝の許可を願ひ出るためのものであった。

この江式の「論書表」を見ると、まず始めに『説文解字』叙の記述をもとに、太古の書契から始まり秦漢にいたる文字の来歴を説明する。続いて後漢以降、時代を追って、文字の整理に携わり功績を挙げた先駆者を列挙していく。そして江式自らが整理を行う理由として、

皇魏は百王の季を承け、五運の緒を紹ぐ。世易り風移り、文字改変し、篆形謬錯し、隸体真を失ふ。³¹⁾と、当時文字の乱れが生じてきた状況を述べる。

時代の移り変わりとともに長い年月の間に、文字はいろいろなかたかに改変され、篆書の形が誤り乱れたり、或いは隸書の体裁が本来の形を失ったりしていた。おそらく江式の時代には様々な文字が横行し溢れかえっていたのであろう。

そこで江式は、代々篆書を家学としてきたことで自らが

先祖より受け継いだ知識を生かし、先人の後を追って、乱れた文字を分別して分類整理を試みることになったとい

う。さらに編纂計画として具体的な方針について「論書表」に以下のように述べる。

輒ち、古来の文字を撰集せんことを求め、許慎の説文を以て主と為す。爰に孔氏尚書・五経音注・籀篇・爾雅・三倉・凡将・方言・通俗文・祖文宗・埤倉・広雅・古今字詁・三字石経・字林・韻集、諸賦の文字の、六書の誼有る者を採り、皆な次類を以て編聯す。文に復た重なる無く、糺して一部と為す。其れ古籀・奇惑・俗隸の諸体は、咸な篆の下に班せ使め、各区別有り。詁訓・仮借の誼は、僉な文に随つて解き、楚・夏の声を音説し、並びに字を逐いて注す。其の知らざる所の者は、則ち闕如するなり。脱蒙は許に遂る。

こうした江式の上表に対し皇帝から裁許の詔が出されて、事業が開始された。『魏書』江式伝に見えるところでは、式、是に於いて字書を撰集し、号して「古今文字」と曰う。凡そ四十卷、大体許氏の説文に依りて本と為す。上に篆、下に隸。

とあり、文字の整理・統一の成果は字書としてまとめられた。その体裁は『説文解字』に倣って上段に篆書を並べ、下段に隸書を並べ、全部で四十巻であったという。また先の「論書表」の記すところによれば、まず始めに古文籀書・奇惑・通行している隸書などの諸体の分類が行われ、次に訓詁や仮借の誼、音韻などの整理が文字ごとに施されたようである。

しかしながら江式伝には続いて、

正光中に、驍騎將軍に除し、著作佐郎を兼ね。正史中字（マ、）。四年卒す。右將軍・巴州刺史を贈らる。

其の書、竟に未だ能く成らざるなり。

とあるから、江式は事業半ばにして亡くなり、この計画も未完に終わったことがわかる。とはいうものの、江式が計画した文字統一事業は、皇帝の裁許を得て始められたのであり、文字の統一が公権力のもとで文化事業として進められたことがわかる。

(二)「論書表」に見る江式以前の文字整理

江式は「論書表」の中に、文字の整理にあたった歴代の先駆者を列記している。江式にとっては、文字整理を行っ

た諸先輩である。それを順番に見てみると、

後漢：曹喜、賈逵、許慎、蔡邕

魏：張揖、邯鄲淳、韋誕、衛覲

晋：呂忱

等が挙げられている。

以下、これらの人物について「論書表」に述べられているところを確認しておきたい。

①曹喜

後漢の郎中、扶風の曹喜、号して篆に工みなりと曰う。

小しく斯（李斯）の法に異なるも、甚だ精巧なり。是

れ自り後学は皆な其の法なり。

曹喜は篆書に巧みであった。李斯の書法と異なるが、曹喜より以後の「後学」は曹喜の書法に依拠したという。

②賈逵

侍中賈逵に詔して、旧文を修理せしむ。殊藝異術、王

教の一端、苟くも以て国に加う可き者有らば、悉く集

めざるは靡し。逵は即ち汝南の許慎・古文学の師なり。

賈逵は前漢・賈誼の九世孫、父は劉歆から古文經典を伝授した賈徽という、代々儒学を家業とした人物である。賈逵が詔を受けて悉く「旧文」を蒐集・整理した、というの

は、『後漢書』賈逵列伝に、章帝の時に「逵、数々帝の為に『古文尚書』、経伝『爾雅』詰訓と相応ずることを言う。詔して欧陽をして大小夏侯の『尚書』・古文の同異を撰令しむ。逵集めて三卷と為す。」と見えることなどを指すのである。賈逵は今文と古文の訓詁に優れた人物であった。また江式が賈逵を挙げるのは、許慎の古文の師であることにも重点があると思われる。³²⁾

③許慎

(賈逵の)後に慎は時の人の好奇を嗟き、儒俗の穿鑿を歎じ、文の誉れに毀たるを惋き、字の訾りに敗るを痛む。更に詭して情に任じ、世に変乱せり。故に説文解字十五篇を撰し、一に首り、亥に終はり、各部属有り、六藝群書の詁を包括し、百氏諸子の訓を評釈す。天地・山川・草木・鳥獸・昆虫・雜物、奇怪珍異、王制礼儀、世間人事、畢く載せざるは莫し。類従群分し、雜わりて、越えずと謂う可し。文質彬彬として、最も得て論ず可きなり。

許慎は『説文解字』十五卷を著した人物である。許慎について江式は『説文解字』叙をもとに記す。³³⁾

江式は、自らが字書の編纂を行う際、編纂方針を『説文解字』に依拠した。そして許慎と同様の方針を「論書表」に示す。これについては後に詳しく述べるので、ここでは、『説文解字』叙に見える、具体的編纂方針についてのみ確認しておく。『説文解字』叙には、

今、篆文を叙し、合するに古籀を以てし、博く通人を取り、小大に至り、信にして証有り。其の説を稽誤し、將に以て群類を理め、謬誤を解き、学者を曉し、神悟に達せんとす。³⁴⁾

と見える。すなわち許慎が行った具体的な作業とは、(1)篆文⇨篆書の文字を示すこと、古文や籀文とも齟齬がないか確認すること、(2)博く識者の説を採り、あらゆることを探求することによって、信頼に足る証拠とすること、(3)それらを整理して誤謬を排除することで、学者の助けとなるよう、文字本来の意味に到達せんとしたものであること、が述べられている。これによって『説文解字』では文字ごとに篆書の文字を行頭に置いて文字の根拠を示し、その下に字義と音節が配置された。

④蔡邕

左中郎將陳留の蔡邕、李斯・曹喜の法を採り、古今の雜形を為す。太学に詔し、石碑を立て、五経を刊載す。題書の楷法は、多く是れ邕の書なり。後に鴻都を開くに、書画の奇能、雲集せざるは莫し。時に諸方、篆を献ずるに、邕に出づる者無し^⑤。

蔡邕は李斯や曹喜の書法を学び、古今の種々の雜體を得意としたという。洛陽の官吏養成機関であった太学の前に石碑（『石經』）を建立し五経を掲示したことや、篆書で蔡邕の右に出る者はなかったことなどを記す。

⑤張揖

魏の初め、博士清河の張揖、埤倉・広雅・古今字詁を著し、諸の埤広を究め、遺漏を綴拾し、事類を増長す。抑も亦た、文に於いて益を為す者なり。然れども其の字詁は、之を許慎の篇に方ふれば、古今の体用、或いは得、或いは失へり。

張揖は『爾雅』を増補して『広雅』をまとめた人物として知られる。江式によると、張揖は『埤倉』『広雅』『古今字詁』を著したという。このうち『埤倉』と『古今字詁』は散失して今に伝わらず、逸文が知られるのみとなつてい

る。

張揖は漏れ遺つた文字を拾い集め事類を増補した。これもまた文字において有益な業績であったが、『説文解字』に比べると、文字の字形と意味は、古今の字体の識別等において得るところと失するところが見られたという。

⑥邯鄲淳

陳留の邯鄲淳も亦た揖と同時なり。博古開藝、特に倉・雅・許氏の字指を善くす。八体六書、閑理を精究し、揖よりも有名なり。書を以て諸皇子を教ふ。又た三字石經を漢碑の西に建つ。其の文蔚炳し、三体復た宣ぶ。之を説文に校ぶるに、篆・隸は大いに同じくして、古字は少しく異なる。

邯鄲淳は古事、特に『埤倉』『広雅』『説文解字』の文字に精通していた。また八体六書すなわち古文や篆書の系譜を引く種々の書体も究めており、張揖より有名で、皇子に書を教えた、と見える。また蔡邕が建てた石經の西に邯鄲淳が三字石經を建てたというが、これについては確証がない。

⑦韋誕・⑧衛覲

京兆の韋誕・河東の衛覲の二家有り。並びに能篆と号す。当時の台觀の榜題・宝器の銘は、悉く是れ誕の書なり。咸な之を子孫に伝へ、世其の妙を称す。

韋誕と衛覲に関しては、江式は文字の整理に関する具体的な業績は伝えていない。しかし二人とも篆書の名手として秀でていたこと、とくに韋誕に関しては宮殿の題額や宝器銘は皆韋誕の書であったという。韋誕は篆書の名人として書論等にその名が見える。³⁷⁾

衛覲に関しては後述するように、江式の六世の祖、江瓊が衛覲に学んで、古篆の法、倉雅、方言、説文の誼を受けたと述べているから、単に書のみならず文字の全般にわたって精通していたのであろう。

⑨呂忱

晋の世、義陽王の典祠令、任城の呂忱、表して字林六卷を上る。其の況趣を尋ぬるに、許慎の説文に附託して、章句を案偶し、古籀・奇惑の字を隠別す。文は隸を正すを得。篆意に差わざるなり。

晋になると、義陽王の頃典祠令であった任城の呂忱は上

表して『字林』六卷を奉ったという。³⁸⁾

江式によると、呂忱が字林六卷を上奏する際、許慎の『説文解字』に依拠して章句を勘案したという。すなわち呂忱はまず、古文や籀文と、怪しい文字によるものを分別した。そして文字に関しては、隸書体の乱れを正すことができた。そうすることによって篆書のもつ本来の意味に違わないようにすることができたという。

当時流布していたテキストの文章や語句を調べて、隸書の誤りを正すためには、古文や籀文、篆書の意に基づいて、それを根拠に判断する必要があったのである。

以上、江式が「論書表」に文字整理の先駆者として列挙している人物を一人ずつ確認した。そこには許慎・張揖・呂忱といった字書編纂を行った人物の記述が見られた。その他には、賈逵・曹喜・邯鄲淳・韋誕・衛覲などが見られた。彼らはいずれも古文や篆書に並々ならぬ知識を有し、篆書に精通したり、巧みとしたりすることで知られる人物であった。³⁹⁾ その中に蔡邕の名が見え、石経建立事業に言及しているのは、江式が蔡邕の石経建立を、字書の編纂にも匹敵する、文字の統一・整理事業の例と見なしているから

である。

(三) 江式による文字の整理

次に「論書表」を上した江式自身についても見ておきたい。

前にも触れたように、江式について世に知られていることは多くない。但し『魏書』江式伝によると、その冒頭に、
江式、字は法安、陳留・濟陽の人なり。六世の祖は瓊、字は孟琚、晋の馮翊太守なり。蟲篆・詁訓を善くす。永嘉の大乱に、瓊官を棄て、西して張軌に投ず。子孫因て涼土に居し、世に家業を伝ふ。祖彊、字は文威。太延五年、涼州平し、内に代京に徙る。書三十余法を上る。各体例有り。又経史・諸子千余卷を献す。是に由て擢して中書博士を拜す。卒、敦煌太守を贈らる。父紹興、高允奏して秘書郎と為す。国史を掌ること二十余年なり。謹厚を以て称せらる。趙郡太守にて卒す。とある。また「論書表」の中にも、六世祖の瓊より六代にわたって古篆の法や字義を伝掌し、その古篆八体を献上して文字を司る役職を得、それを家業としてきたことが記されている。そして江式は先祖から伝えられてきた伝掌の教

えに従って文字の整理をするのだという。⁽⁴⁰⁾

このように、代々蟲篆と詁訓に通じそれを家業とするような家に生まれ、江式自身も篆書に精通した人物であった。江式の「論書表」に列挙されているように、漢代以降、文字の整理に当たってきたのは、詁訓に通じた人物というよりむしろ、篆書の文字に精通した人物である。中には韋誕のように、篆書の名人として知られる人物も見られたが、彼らはおそらく篆書の字形に精通していたと思われる。

呂忱の功績に見たように、様々な書体が横行している中から、篆書や隸書の真贋を見極め、正しい文字を選び分けて、系統立てて整理するには、詁訓学や音韻の知識のみでは不可能で、字形そのものを正確に見極める知識と能力が必要とされた。それ故江式のような代々家業として篆書に精通した、書の専門家の判断にゆだねるしかなかったのではないかと思われる。

先の「論書表」の概略で見た江式の編纂方針にも「其れ古籀・奇惑・俗隸の諸体は、咸な篆の下に班せ使め、各区別有り。詁訓・仮借の誼は、僉な文に随つて解き、楚・夏の声を音読し、並びに字を逐いて注す。」とあるように、詁訓や音韻よりも先に諸々の書体の選別が挙げられてい

る。当時書体というのが字形を選別したり、語義を決定する上で、重要な役割を担っていたと同時に、書体と字形が密接な関係にあったということが出来る。そして、北魏に至ってもなお、隸書体を選別・整理するのに、江式のような篆書の専門家があたっていた点にも注意が必要である。

(四) 江式の拠りどころ

先に見たように江式は文字を分類整理するにあたって、許慎の『説文解字』に準拠した。最終的な字書の体裁も『説文解字』のように篆書を上段におき、その下に隸書その他の文字をおくという方針であった。しかし江式が許慎の方針に準拠するのは、単に『説文解字』の体裁を真似るとか、文字整理の基本原則と考えて、そこに回帰することをめざしたのではない。以下で江式がどのような意図に基づいて整理を行ったのか、「論書表」に述べられているところを見ていく。

江式は許慎について、『説文解字』をまとめた理由として、

儒俗の穿鑿を歎じ、文の誉れに毀たるを惋き、字の訾りに敗るを痛む。

と記す。すなわち許慎が、低俗な儒教学者の勝手な解釈を嘆き、文字がもてはやされたり軽んぜられたりして本来の姿を失う状況を嘆いていたことを提示する。

あるいは、江式自らがおかれた状況についても、

俗学鄙習、復た虚巧を加え、談弁の士、又た意を以て説き、時に炫惑し、以て釐改するに難し。

と記し、文字が低俗な学問によって虚りの工夫が加わったり、声高な人がさも有りそうな意味を説いたりすることに惑わされて、是止するのが困難になっていることを述べる。

これらはいずれも『説文解字』叙に見える表現であり、『論語』や『書経』の語を基にした文章である。⁽⁴⁾

あるいは江式は同様に、

文字なる者は六藝の宗、王教の始め、前人の今に垂る所以、今人の古えを識る所以なり。故に曰く、本立ちて道生ず、と。孔子曰く、必ずや名を正さんかと。又た曰く、述べて作らずと。書（『書経』）に曰く、予れ古人の象を觀んと欲すと。皆は旧史に遵修して、敢えて穿鑿せざるを言ふなり。⁽⁵⁾

と記す。

これも孔子や『書経』に基づいた『説文解字』叙に見え

るところを踏襲しながら、江式自らもその方針に従う意向を著した文章である。すなわち「古人が象つた」ところに従い、後から「述べて作」ったり、「穿鑿」すなわち勝手な解釈を加えることを排除して旧史すなわち古典に遵うという。後漢の頃古文学派は古文のテキストを解説する際、テキストに忠実かつ客観的な態度で臨むという合理的な学問を貫いた。江式もまさに許慎等と同じ姿勢を踏襲することを表したものと見える。賈逵が許慎に先んじて先頭におかれたことも十分に理解できるのである。

(五) 蔡邕の抛りどころ

次に蔡邕が太学に石經を建てた際の経緯にも注目してみたい。蔡邕はいかなる所存で文字の整理に臨んだのであるのか。

『後漢書』蔡邕伝を見ると、蔡邕は熹平四（一七五）年に石經を建ててゐるにあたり、堂谿典等とともに奏上して六經の文字を正し定めることを求めたという。その理由として、邕以上には、經籍は聖を去ること久遠にして、文字は多く謬り、俗儒穿鑿して後学を疑わせ誤らすと。（傍点

筆者）

と述べている。「俗儒」とは江式の「論書表」に見える「俗学」と同義語と思われる。すなわちここにも、後世加わつた余分な解釈を意味する「俗儒穿鑿」という常套句が見られる。

すなわち経籍が本来の聖人の意図や解釈を離れて、文字が多く誤つたり、「俗儒」によつて勝手な解釈が加わつたことによつて、後の時代の人を混乱させたことを文字を正す理由として述べている。そしてそれらを排除して本来の文字の姿に立ち返ろうとする姿勢が見られる。つまり許慎や江式と共通する学問姿勢を確認することができる。

ここに蔡邕の功績を、両者の中間に位置づけることが可能となる。

すなわち『説文解字』を作つた後漢の許慎と、『古今文字』の編纂をめざした北魏の江式を繋いだ線上に、確実に蔡邕の存在を確認することができるのである。先に見たように、江式は「論書表」の中で蔡邕について、許慎と同様にかんりの文字数を割いて言及している。このことから江式は蔡邕を、許慎同様に文字の整理に功績のあつた重要人物として認識していたことが窺える。

そしてこれらに共通する、あとから勝手な解釈を加える

「儒俗の穿鑿」や「俗学鄙習」、「談弁の士」というのは古文学に対する、漢代の今文儒学の姿勢を批判するものである。北魏の時代にいたってもなお、篆書を家学とする学者においては、そういった漢代の学問姿勢が継承されていたのであろう。

以上のように北魏の江式においてもなお、文字を選別・分類する際には、依然として後漢代に古文学派が打ち立てた学問手法が継承されていた。世に横行する間に乱れた要素を取り除いて、真偽の判断を下すためには、賈逵・許慎・蔡邕らを含む古文学派による手法を拠りどころとし、篆書に基づいて判断する方針がとられたのである。

(六) 小結

本稿でこれまでに確認したように、後漢より北魏の頃まで文字の整理・統一は、後漢の古文学派の許慎らの手法に依拠しつつ、篆書文字を根拠として隸書体文字を判別・選定するものであった。歴代の文字の整理・統一を担ってきたのは、篆書文字の専門家であった。それはこれまでに見てきたように、訓詁や音韻の整理以前に文字の形の判断が必要であったためと考えられる。

前稿においては、唐代にいたるまで、公文等を記す「真書」と呼ばれる書体に対して楷書概念は存在せず、草書と対極をなす書体は常に隸書と認識されていることを指摘した。そして唐代にいたると、律令文書体制と爆発的な文字の需要を支えるべく、太宗のもとで王羲之書法をもとに楷書体が整備され、従うべき標準書体として示されて、官人の学ぶところとなった。この楷書体に対しては『干祿字書』が編纂された。ここでは文字は正字体・通字体・俗字体と字体ごと分類されて、それ以前の字書とは全く異なるカテゴリーと分類法によって文字が整理されることとなる。ここで字体というものが始めて正式に成立したともいえる。

またそれまでは、字体や字形は書体と切り離すことのできないものであり、この段階までは字形は書体といわば未分化であったのである。

唐代にいたるまで正式の書体が隸書と認識され続けたのは、一つに文字の根拠が篆書にあり、篆書に裏付けられていたことによると考えられる。

篆書体は隸書体の形の根拠を裏付けるものであり、儒学は常に篆書体という古い形態に立ち戻ることで学問の客観

性を保っていた。それが六朝以降、漢訳仏典流入の増加を始め、儒学以外の学問・芸術・文学が発達してくると、文字の形は篆書に裏付けられなくてもよいことになる。

北魏で江式が後漢以来の古文学派の手法を踏襲して乱れた文字を整理する目的で字書の編纂を目指したのに対し、南朝ではその後梁・顧野王が『玉篇』の編纂を行っている。『玉篇』は後に言うところの楷書体で書かれ、部首別に整理された。北朝では篆書に基づいて隷書を正そうとしたのに対し、南朝では王羲之父子の出現以降、行書体や草書体の発展が見られたが、これは筆法としての運動面も含めて文字がより実用化に向かって合理化が進められ、伝達手段としての機能が充実したためと考えられる。

王羲之の書法が入ってくることにより、筆記文字としての機能が実用面において格段に改良される。この様な文化の大転換や、社会的には律令体制が築かれ文書システムが成熟してきたことに、時代が新たな形の隷書体を必要とする要因があった。そして隷書体が篆書体から解放されることによって誕生したのが、初唐に太宗のもとで整備された次なる楷書体であったのである。

四、熹平石経

前節までに魏の江式が蔡邕の石経を、歴代の字書の編纂と並ぶ文字の統一・整理事業の一つとして認識していたことを見てきた。蔡邕の石経は、当時の文字の形、あるいは書体に関して統一基準を示すという大きな役割を果たしたと考えられる。

ところで蔡邕が残したとされる熹平石経について見てみると、書道的評価は低い。『書の総合事典』によると、「書体は「乙瑛碑」とも共通する八分だが、いわゆる漢碑ほど扁平な字形ではない（図1）。文字の正確さを示すための

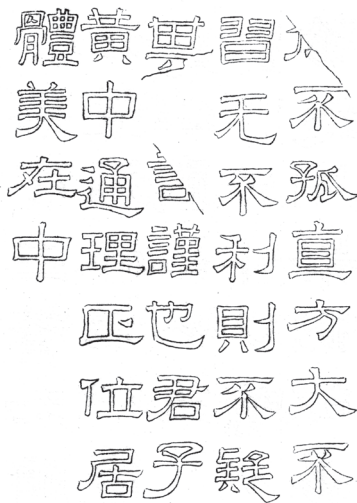


図1 熹平石経の例（『周易』の一部。羅振玉『漢熹平石経残字集録』石上より転載）

書なので、縦横の比率を揃え、波磔を短めに抑え、升目に並べたように整然としている反面、変化に乏しく、芸術性は高くない、と評価しない向きも多い」と説明されている。⁽⁴³⁾ それは一つに、複数の人間の手になるものであることなどがその原因といわれている。⁽⁴⁴⁾

しかし、ここで指摘されている「芸術性が高くない」というのは、この石経の特徴を非常に良くとらえた表現であるということが出来る。それはすなわち、同時代の隸書や八分と比べてみると、隸書や八分の美しさや特徴を兼ね備えていない、ということである。実はそこにこの石経の制作者の意図が込められている、と考えることはできないであらうか。

そこで残された熹平石経の断片を観察して、そこからいくつの特徴を列挙してみると、

- ①横画が水平
- ②払いがコンパクト
- ③縦線・横線ともに太かったり細かったりせず、一定の太さ

などの特徴が見られ、通常の八分に比べるとかなり裝飾性が排除・簡略化されている。大部の經典であるために、複

数の人の手によって制作されたためとはいえ、今までに知られている出土例の石経断片からは、以上のような特徴が共通して見られ、一つの統一方針と見ることもできる。

列伝には蔡邕について「古今の雑形をなす」、すなわち古文や篆書、あるいは雑体書（＝様々な用途に応じた書体）を得意としたことが見える。あるいは当時の「題書の楷法」がいずれも蔡邕のものであったとも記す。これは建物の門戸等に掲げる題額を書すのは当時随一の書家を選ばれたことを示す、史書に見られる能書家を表す慣用表現であるが、蔡邕は学問的な功績のみならず、篆書・隸書を始め様々な雑体書に至るまでを操ることのできる能書家でもあったのである。その蔡邕が六経に対する古文学派の学問的成果を世に公表する際、低水準の隸書で公表することに躊躇がなかったとは考えにくい。ましてや、対立する今文学派も操る隸書において劣るということは聊か考えられない。

大量の六経テキストを公表する必要に迫られ、文字に合理性が求められた際、学問を合理主義に推し進めた蔡邕が、当時の隸書体を脱してより実用になつた合理的な書体に向かったとは考えられないであらうか。

蔡邕らは今文派を斥けて經典を示す際、篆書に基づいて隸書から余分な装飾的要素をふるい落としした際、一層実用に適した方向に踏み出したのではないだろうか。篆書に裏付けられた隸書体文字の形の要素をいじることができるのは、篆書に精通した当代随一の学者の他には、なしえなかったのである。

蔡邕伝に見える、石経が建てられた際、車が列をなして街路を埋め尽くした逸話¹⁵は、經典の新たなテキストが提示されたことに意義があるのと同時に、その書体の斬新性に注目が集まったためとも考えられる。あるいは、後世書道史で楷書体の祖のごとくに称される鍾繇が、蔡邕を学んだとしてしばしば関連付けられるのも、単なる逸話ではなく八分のような装飾性の強い書体を脱して合理的な書体に向かう転換点としての認識が残存していたことに起因するのかもしれない。

学問が古文学派によって合理主義へと転換していったのと軌を一にして、書体もまた実用のための合理性を求める方向に向かったと考えられるのである。

もちろんそれは篆書に裏付けられる隸書の範疇にあり、前稿で見たように唐代にいたるまで隸書の名称で認識され

ていた。社会の中では行政公文を記す正式の書体、すなわち正書あるいは真書としての役割を担うものであった。しかし隸書と呼ばれるながらも、後漢のころから隸書体から脱却した書体が見えはじめた。例えば後漢末から三国時代初にかけての長沙・東牌楼出土後漢簡や長沙・走馬楼出土三国呉簡に見られる書体などは突然変異によって出現したように見える。それは従来のように表現方法の変遷のみから

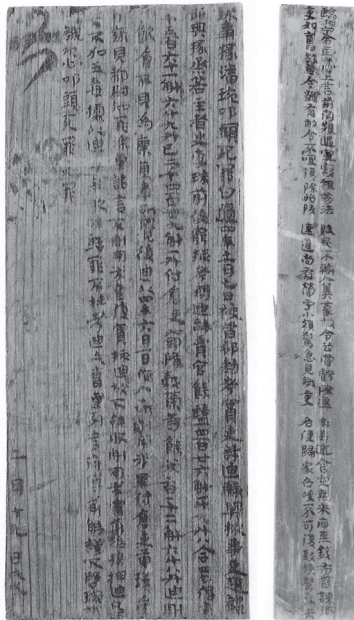


図2

後漢末から三国時代初にかけての書体例

- 右…長沙・東牌楼後漢簡一（長沙東牌楼東漢簡）。
- 左…長沙・走馬楼三国呉簡官府文書（長沙市文物工作队・長沙市文物考古研究所「長沙走馬楼」二二発掘簡報「一文物」一九九一五）。

は説明できない現象である。

書体と字形とは未分化なまま文字として、公権力によってその時々々に整理・統一が図られた。後漢末における楷書体の萌芽という現象は、文字に対して何らかの新たな統一基準が示されたことに起因すると見るべき現象ではないかと思われる。

おわりに

前稿では楷書の変遷について、後漢以降の史料に見える「楷書」の語、社会における認識、隋・唐代における「完成形」といわれる楷書体の成立要因を考察した。前稿に引き続き本稿では隸書体の中から楷書体へと形態が変化する契機について考察した。

文字は普及・拡大することによって実用の中で乱れが生じ、その時々々に程邈、蔡邕、江式などの学者によって公権力のもとで整理・統一が試みられたのである。

書道芸術の中で、様式論の変遷が論じられることはたいへん重要なことである。それによってどのように文化が伝播されたのか、そこから様々な問題が提起されてくるので

あり、重要な示唆を多く含んでいる。

しかし、書体の変遷を様式論のみでとらえるのではなく、社会的な契機から捉えていくことも重要である。書体の普及は流行の伝播のみならず、まず公権力により当時もっとも文字を駆使する立場にあった実務官人を養成する場において示されて、そこから普及するものであったことを忘れてはならない。その点を押さえた上で様式論の変遷を押さえることは、より構造的に書道文化を解明していくことにもつながるだろう。

蔡邕の石経に倣って、その後三体石経、あるいは開成二年（八三七）には開成石経が建てられた。これらはいずれも官吏養成機関である太学の前に建てられており、文書行政の実務を担うことでこれから最も文字を駆使する人たちに学ばせようとしたものである。

もちろん蔡邕の列伝に記すように、熹平石経を建てた際、世間が注目するところとなったこともある。しかし実用における文字の普及は、世間一般に漫然と普及するよりも先に、実務官人が公務の中で膨大な量の文書を作成し、膨大な量の帳簿を書き続けることにより、それが巨大な原動力となって社会に普及していった。普及が進み、文字が乱

れると整理と統一が企てられたのである。

このような社会的変遷過程と芸術として表現方法が発展成長した過程とは別に考察すべき問題であり、本稿のような観点からさらに追究する必要があると思われる。

従来の研究では、書体の変遷については一つの書体が通用による早書きによって崩れ、そこから新たな書体を生成することを繰り返した、と説明される⁽⁴⁶⁾。しかし書体は単に自然発生的に「生成」したり「完成」したりしたのではない。表現方法の変化が見られるとしてもそれは根本的要因とはならない。大西克也氏は秦の始皇帝による「隸定」の状況を明らかにされたが、実はその後も、文字のかたち、すなわち字体や書体や語義については公権力による統一が企図され、学問による合理的根拠に基づいて定められていたのであり、書体もそれに則ったものであったと考えられる⁽⁴⁷⁾。

注

(1) 拙稿「楷書体について」(古瀬奈津子編『古代日本の政治と制度―律令制・史料・儀式―』同成社、二〇二二年)。以下文中に、前稿とあるのはすべてこれを指す。

なお本稿では「楷書」「隸書」は書体名称として、また「楷書体」

「隸書体」は書体の形を表す語として用いることにする。

(2) 大西克也・宮本徹『アジアと漢字文化』(NHK出版、二〇〇九年)、『書の総合事典』(柏書房、二〇一〇年)。

(3) 注(1)前掲拙稿参照。

(4) 張彦遠『法書要録』巻三、八七頁(以下、『法書要録』は、人民美術出版社、一九八四年刊行のものにより頁数を示す)

(5) 中田勇次郎『鍾繇とその書』(『中国書論集』二玄社、一九七〇年)。

(6) 中田勇次郎『中国書論史(二)』(『中国書論大系』第一巻唐1、二玄社、一九七七年)。

(7) 『法書要録』巻二、七五頁。

(8) 『法書要録』巻一、一六頁。

(9) 『法書要録』巻八、二四八頁。

(10) 『法書要録』巻八、二六三頁。なお、張懷瓘は蔡邕を八分と飛白の名手とする。特に飛白についてはその創設者とする。但し張懷瓘が蔡邕を八分の名手とするのは、古書雑体の楷書を八分とする独自の解釈に基づくものであるから注意を要する。また蔡邕が飛白を創設したことは、『書断』のほか、唐・崔備『壁書飛白蕭字記』(『法書要録』巻三)にあるだけで、それ以前の資料には見えない。

(11) 『法書要録』巻八、二六三頁。

(12) 『晋書』卷三十六列伝第六、衛恒伝。「篆勢」は『蔡中郎集』に見える。

(13) 『法書要録』巻一、一〇頁。

(14) 蔡邕については、先に挙げた『古今書評』『書断』の他には『四
体書勢』『古来能書人名』『諸後品』『書譜』などにも見える。
また『書断』上には蔡邕の著作として、「大篆讀(＝篆勢)」「
小篆養」「隸書勢」「勸学篇」「聖皇篇」(最後の二つは『隋書』
経籍志にも見える)などが見えるほか、『初学記』には「篆
書体」が見える。

(15) 丹羽兎子「蔡邕伝おぼえがき」(名古屋大学文学部研究論集
五六(史学一九)、一九七二年三月)はその代表的な研究成
果である。

(16) 『独断』の成立事情に関しては福井重雅氏の詳細な研究があ
る。本稿では蔡邕の学問的経歴や彼がおかれていた状況に
ついて福井氏の研究に従った(「蔡邕と『独断』」(『史観』
一〇七、一九八三年)、『独断』解題」(『訳注西京雜記・独断』
東方書店、二〇〇〇年)。

(17) 丹羽注(15)前掲論文に詳細な考証がある。『後漢書』蔡邕
列伝卷五十下(以下、『後漢書』蔡邕伝)に、
少くして博学、太傅の胡広に師事す。辞章・数術・天文
を好み、妙みに音律を操る。

とある。また『後漢書』志第四礼儀上、謝沈註に、
太傅胡広、旧儀を博総して、漢制度を立つ、蔡邕依りて
以て志を為す。

と見える。なお、『後漢書』は、吉川忠夫訓注『後漢書』(全
十一冊)(岩波書店、二〇〇一年〜二〇〇七年)を参照した。
(18) 東観における『東観漢記』の編纂は明帝の永平年中(五六

〜七五)頃に始まり靈帝の熹平年中(一七二〜一七七)頃
まで長年に渡り継続されたが、蔡邕は靈帝の代、熹平年間
すなわち終盤部分で編纂に加わった。『独断』を執筆した直
後に『漢記』の編纂に携わったことから『独断』は『漢記』
のための習作、基礎作業であったと見られている。
(19) 「十志」のことで、桓帝・劉志の諱を避けるためにこう呼ば
れる。

(20) 范曄の『後漢書』には元来「天文志」や「五行志」が存在
したと見られるが今に伝わらない。現在知られる『後漢書』
志は、後に司馬彪が編んだ『統漢書』志を合刻したもので
あるが、これをさらに遡ると司馬彪は、蔡邕の志を参考し
て執筆したという。ちなみに蔡邕の「車服志」「礼楽志」
などは、『文選李善注』、『北堂書鈔』、『初学記』、『芸文類聚』
『太平御覽』に引用されているから、その時代まで伝存して
いたと考えられる。

(21) 『後漢書』列伝五、蔡邕列伝第五十下の最後に見える。

(22) 『独断』はこうしてかろうじて後世に伝わった著作の一つで
あった。彼が編纂に携わった『漢記』は、逸文がわずかに
知られるのみである。それゆえ『独断』の価値は大きい。
ただ福井氏によれば、『独断』巻二はかなりの脱誤や錯簡が
あり、また後世の加筆もあるので、現行本の全てが自筆と
はいえないという。

(23) 東観については小林春樹氏による研究に従った(『後漢時代
の東観について―『後漢書』研究序説―』(『史観』一一一、

一九八七年)。

(24) 最も東観の立場を代表するのは、張衡の「虚妄にして聖人の法に非ず」という言葉であろう。張衡はその著書『論衡』の中で図讖と図讖に基づく史記や漢書を批判した。

(25) 小林春樹氏によれば、東観では、「図讖中心の今文学を批判する立場にあったとされる古文系統の儒学を修め、それまで漢王朝の絶対性や神秘性を主張するばあいに根拠とされてきた図讖に対して合理主義の立場から批判を加えるとともに、遂にはこれを否定するに至った。」という(小林注(23) 前掲論文、以下同様)。

(26) さらに東観の古文学派によるこのような新たな歴史観は、史学が儒学から次第に自立してくる後漢中期以後の状況に対応する形で成立したという。

この当時史学は独立しておらず、六芸にある春秋の分野でしかなく、儒学の下におかれていた。後漢末靈帝の頃に、史学は経学(≡儒学)と併称されるようになり、「経、史、子、集」に分類されるように、独自の学問領域を確立する。

(27) 東観人士の処世観には道家的傾向が見られ、そこには六朝士大夫の先駆けともいえる性格が窺えるという。彼らは儒・史・道・文学など多方面に渉る教養を身につけていた。一方蘭台令史らは図讖を中心とする、今文系儒学に固執したという。

(28) 吉川忠夫氏は、『東観漢記』は班固の『漢書』に比べるとはるかに及ばないものであり、評判が良くなかった、とする『三

国志』等の記事を挙げる(『後漢書』解題、吉川忠夫訓注『後漢書』第一冊、岩波書店、二〇〇一年所収)。こうした批判は学問的見解を異にする立場の言と見るべきものであるろう。

(29) 『魏書』卷九十一列伝術藝第七十九江式(以下、『魏書』江式伝)、『北史』卷三十四列伝第二十二江式。

(30) 江式の論書表は、張彦遠『法書要録』卷二に収録され、従来の書道史の研究では書論として扱われている。しかし皇帝に上表され、史書の中に遺されたものであるから、他の書論や筆法伝授書に比べて後世の加筆の可能性もなく、信憑性が高い史料であると同時に、重要な情報を多く含んでいる。

以下、江式の論書表については、『法書要録』卷二所収の原典である『魏書』江式伝(注(29) 前掲)によることとする。なお、『法書要録』には北宋・虞祜の論書表も収録される。こちらは史書に見えず錯簡を多く含むが、江式の論書表同様に貴重な情報を多く含む史料である。こちらについては、拙稿『国家珍宝帳』に見える『王羲之書法廿卷』の性格(『弘前大学国史研究』一四二、二〇一七年)で詳しく論じた。

(31) 以下、江式の「論書表」の書き下しは、『法書要録』所収「論書表」の福本雅一氏による訓読、訳も参照した(論書表 後魏・江式)、中田勇次郎編『中国書論大系』第一卷漢魏晋南北朝、二玄社、一九七七年所収)。

(32) 福本雅一氏によれば、江式が記した賈逵の経歴は『説文解字』卷末、許慎の息子許冲上奏文からの引用であるという

(注(31) 前掲書所収「論書表」の注(46)。(注(46) 同氏は、「修理旧文」とあるのは安帝永初四年(一一〇)「校定東觀五經諸子伝記百家芸術、整齐脱誤、是正文字」(『後漢書』卷五)を指すとする(同注(47))が、賈逵は永元一三(一一〇一年)に亡くなっているので相当しない。

(33) 許慎に関する記述は『説文解字』叙を踏襲した部分が多い。たとえば「類從群分」とあるが、これは『説文解字』叙に見える「將以理群類」といった表現を踏襲するものである(注(31) 前掲書所収の注(59) で福本氏が根拠にあげる「方以類聚物以群分、同条牽属、共理相貫、襍而不越、抛形系聯」という表現は、『説文解字』叙本文には見当たらない。

(34) 『説文解字』第十五上。書き下しは、注(31) 前掲『中国書論大系』第一巻所収の福本雅一氏の訓読・訳を参照した。

(35) 江式「論書表」は『後漢書』蔡邕列伝とは異なる部分を多分に含んでおり、蔡邕列伝からの引き写しではない。

(36) 雑体の書については、注(1) 前掲拙稿参照。

(37) 韋誕に関しては篆書と並んで楷書を得意としたとされる。それに関しては注(1) 前掲拙稿参照。なお、邯鄲淳・韋誕・衛覲に関しては『三國志』魏書卷十一・胡昭伝の夾注に「昭、史書を善くす。鍾繇、邯鄲淳、衛覲、韋誕と並びて有名なり。」とあり、後世に四賢の一人と称される鍾繇と併称されている。

(38) 『隋書』経籍志(卷三十二志第二十七経籍一)には七巻と見える。しかし今に伝わらず、逸文がわずかに知られる。弟

の呂静の作った『韻集』も隋書経籍志に「韻集六卷晉安復令呂静撰」とある。なお呂忱については「論書表」の他にあまり見えず詳細は知られていない。

(39) 史書等に「篆書を善くす」という常套句が散見する。これは後世に書が巧みな人物を評して「草隸を善くす」(『書に巧みである)と記すのとは若干異なる。当時篆書は書体名称というより、篆書文字を指す語であり、篆書文字に深く精通していることを意味したと考えられる。なお文は文字を指す場合があり、篆文とは篆書文字のことである。

(40) 江式が代々篆書を伝える家柄であったことを、「論書表」では、次のように述べている。

臣六世の祖瓊、家世陳留なり。往晋の初、従父兄応元と俱に学を衛覲に受く。古篆の法、倉雅・方言・説文の誼、当時並びに善譽を収む。而して祖の官、太子洗馬に至り、出でて馮翊郡と為る。洛陽の乱に値ひ、地を河西に避くも、数世伝習す。斯の業墜ちざるの所以なり。世祖の太延中、皇城西被し、牧犍内附す。臣の亡祖文威、策を杖して帰国し、五世伝掌の書、古篆八体之法を奉獻し、時に褒録を蒙り、儒林に叙列さる。官は文省に班し、家は世業を号す。臣闇短にして、識学庸薄なるに暨び、家風を漸漬し、忝有るも頭はる無し。但だ時來るに逢ひ、恩は願外に出づ。毎に澤を雲津に承け、厠に漏潤に霑ふ。文閣に駆馳し、史官に参預し、篆を宮禁に題し、猥りに上哲に同じくす。既に愚短を竭し、罷めむと欲して能はず。是を以て敢て

六世の資を藉り、祖考の訓を奉遵し、竊かに古人の軌を慕ひ、儒門の轍を企踐し、輒ち古来の文字を撰集せむことを求む。(後略)

(41) 『説文解字』叙に「皆不合孔氏古文、謬於史籀、俗儒、鬲夫、翫其所習、蔽所希聞、不見通学。(傍点筆者)」という記述が見える。

(42) 「本立ちて道生ず」は『論語』学而の「君子務本、本立而道生。」「述べて作らず」は『論語』子路第十三の「述而不作、信而好古。」から、また「書(『書経』)」に曰く、予れ古人の象を觀んと欲すと。必ず旧史に遵修して、敢えて穿鑿せざるを言ふなり」は、『書経』に基づいた『説文解字』叙の「予欲觀古人之象、言必遵修旧文、而不穿鑿」からの引用である。私は古人の象つたものを見たいと思う、とあるのは、皆は古文に従いそれを修めて、こじつけの解釈をしないことをいうのである

(43) 注(2) 前掲書。

(44) 熹平石経は一九二二年に洛陽の太学の跡地から一〇〇〇片を越える断片が出土した。それらを謄写・収録した羅針玉『熹平石経』は文字の姿を見る上で貴重な史料となっている。

現在北京の中国国家博物館の他、洛陽、陝西省、上海等の博物館で所蔵される他、日本の書道博物館にも論語・公羊春秋経の断片が所蔵されている。

(45) 『後漢書』蔡邕伝、熹平四(一七五)年条に「碑始めて立つに及んで、其の觀視し及び摹写する者、車乗日ごとに千余

両あつて街陌を填め塞ぐ」とある。

(46) 注(2) 前掲書。

(47) 日本史においては写本類をはじめ、前近代にいたるまでの莫大な量の古文書類といった伝存史料・出土史料ともに墨筆史料を研究対象とし、実用書体を直接觀察しながら、史料学的研究を發展させてきた。そのため刊本を中心に研究する中国史において、近年出土簡牘などの墨筆文字の研究が盛んになったことに加え、書体研究には、日本史の知識を実用の書の変遷や役割の解明に、生かせるのではないかと考える。

〔付記〕

本稿はJSPS科研費基盤研究(C)「歴史資料としての「書」が今、語り出す」(研究代表者黒田洋子、課題番号JP一七K〇三〇六七)の助成を受けたものである。